

跋

横浜、横須賀の人たちで毎月第一水曜日に行っている一水会という旬会がある。松崎先生をはじめとして十名ばかりのささやかな研究会だが、メンバーは気ごころの知れた男ばかり、批評は辛口、ときに毒舌も出てすべてに遠慮抜き、小気味良い清爽の気をはらんだ会である。高沢良一さんは五十五年頃から一水会に出るようになり、現在は主要メンバーの一人である。主要というのは、良一さんの司会がてきぱきと会を進め、発言も活発だからである。くりくりとした眼を輝かせ、頬を紅潮させて夢中でしゃべり、われにかえって、はにかみの眼を伏せる良一さんの面差しを見ると、その胸中に童心と熱情の所在がありありと読みとれる。

一水会の会場はいく度か変わってきたが、五十七年頃から今の横浜市金沢区地区センターに定着している。自分の住居区ということ、良一さんが役所と折衝し世話をしてくれたのである。

良一さんの俳歴は略歴によると五十一年「濱」入会になつてゐる。しかし、俳句への素地はその以前からあつたやうだ。御両親は共に若い頃から句作されていて、父君は既に故人となられたが母堂は「鶴」で今なお腕を奮つておられる俳句一家なのだ。そんな環境の中で育つた良一さんは門前の小僧よろしく極く自然の形で高校、大学時代を通じて俳句に親しんでいた。師にづくでもなく我流で過ごしていた良一さんは、五十一年勤務先の三田日本電気の職場俳句に出て俳句との縁がふかまる。更に「濱」に入り大野林火先生に師事するに至つて俳句に対する態度をハツキリとさせた。内にかまえて俳句を思いつめる、すなわち志を持ったのである。

紅梅にもつとも近く女ごゑ

ぼうつたんの白に浸りてゐる浴後

水仙の初花一本目の香氣

紅梅の中へ一步の夕ごころ

水仙の香のつきぬけてゐる夜空

散りそめて白さるすべり水の上

寒牡丹こゑあたたかく讚へらる

「濱」入会四、五年目までの作品を抄出したがいずれも調べが高く、豊潤な香をたたえ、詩情に澄みをこころざした秀句が並ぶ。良一さんの詩才を存分に示した一連と云える。中でも寒牡丹の一句からは良一さんの人温をもつて醸されたいつくしみの詩情があたたかく伝わってくる。そういうあたたかさは、

よき顔の里芋を頒く子の皿へ

大いなる春月母子寄る方に

祖父の忌の雨たつぷりと葱畑

長湯の子柚子もろともに掬はんか

団欒の灯にゆきわたりさくらんぼ

よく食べる子にはさくらんぼが出るぞ

など、家族を詠った諸作にいつそう著しい。特に子供とあそび興じ、語りかけるときの作品には構えがない。こころのおもむくままのくつろいだ表現から、ほのぼのとした父子像が浮んで

くる。

一体に良一さんの作品は軽妙、洒脱な味を持つ。把握、表現とも一見無造作に見えるが、直感で得た詩因は大事に抑えて決して逃さない。持つて回った云い回しや、袂を着けたいかめしい表現とは無縁、気張らず構えずが身上なのである。この生得の氣質が生み出す飄逸さと自在さは他の追従を許さぬところだ。集中の、

遠浅の海に遊べること朝寝

弁慶の泣きどころにて蚊の打たる

長梯子どこへ掛けても師走空

蝸の申し送りに嶺々昏れて

絵扇のあらかた竹の性抜けて

気の遠くなるまで蒲団干されけり

鳥籠を日向にサトー八チロー忌

花火野郎青嶺の肝を抜き来しと

などはどれもこのことを証左している作品であろう。更に自然詠を眺めてみるときの、

裸木となりてさくらはそこらの木

待宵の濡れ岩隠り蟹の爪

切株の白打つて雨盆の山

口笛に空鮮しや桐の花

うすらひをつつとと鷺浄瑠璃寺

草の花氷室名残りの上り坂

竹の葉の降るになかなか昏れぬなり

拾ひあぐ落葉に朴の木の遠し

竹が散るまた散る諭されぬることし

白日傘水母の海を覚ましゆく

裏山より年を届けにみそさざい

朴落葉山の暦日重ねけり

などの句に共通するものは有情のなつかしさであるう。情と景の均衡の奥に紛れのない作者の明るい意気ごみがのぞく。中でも、

朴落葉山の暦日重ねけり

の句の提示する観照は重厚、その上滋味おのずから具わった作、良一さんの自適を楽しむ姿が

見えてくる。林火先生は良一さんの持つ情趣をすぐれた資質として挙げつつも、情趣が情趣だけに終らず自然の力で身を養うよう指針を示された。そして繊細にすぎて瘦せぬようにとも言われている。それに応えて良一さんの作風も逐年豊かさを加えつつある。

霜旦のイエスに通ず緋毛氈

仏頭をあづかる寺に鉦叩

十夜僧くわりんのごとき頭をしたり

花椎か薬師の壺か夜を匂ふ

白菜をどかと仏へ飛鳥人

すべて精気に満ちており、事物との対決に心身を掛けた迫力を具えている。

良一さんはよく吟行に出る。一人で出ることもあるが、数人のことが多い。大勢連れ立っての吟行はあまり好まぬようだ。そうかといって孤立型の人ではない。私も何度か一緒に歩いた。一泊の旅もたびたび共にした。そんなときの良一さんは実に人なつこさを示す。夜酒が入った

ときの能弁ぶりも爽やかさを失わない。人間好きなのだ。人は大抵気の合ったグループで吟行を行うが良一さんの相手は世代、男女の枠を越えて範囲が広い。大胡さんのような傘寿を越えた人とも歩くし、竹内さん、神谷さんのような新進の女流とも歩く。

気兼ねなく誰とでもすぐ解けあう親しさを持つた良一さんに、

草稿に手を置くことも夜の秋

空ら拭きの机にひびくしぐれかな

月明の紙魚と遊びて師の忌来る

臘梅に夫婦二組佇める

繰上げて海晴るる日の七五三

独りごつ男蘇枋の花を過ぐ

のような落ち着きを見せる作品がある。いずれも寡黙な句だが身に引き裾えた勁さを持つ佳品と思う。そこに生活をひとまわり大きくした、人生の底深きところを置く良一さんの風姿の豊かさを見る。

平成二年四月

下田 稔



